

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

—文化的志向性の議論を交えて—

落合 るみ子

1. はじめに

「～じゃない？」や“Don't you～?”といった形式は、否定辞を伴った疑問形式であるため、否定疑問という文法的な範疇に収めることができる。このような文法的範疇の有用性は、異言語間の比較対照研究を行う上で、1つの妥当なアプローチになりうると考えられることであろう。

本稿では、課題解決型のタスクを行う日本人とアメリカ人のディスコースにおいて、否定疑問がそれぞれどのように用いられ、どのように機能しているのかについて、相互作用的な観点から分析する。サピア-ウォーフの仮説 (Sapir-Whorf hypothesis) をはじめ、言語相対論 (linguistic relativism) で議論されているように、言語はその文化や思想や習慣を反映しており、言語行動の背景にはその文化ごとの規範が現れると考えられるが、否定疑問の使用においては、どのような言語文化的志向性があるのかについて、議論を行う。

同一の文法的範疇に収まるものでも、その機能は言語間で異同があるものと期待される。しかし、日英語の否定疑問の対照研究は皆無に等しい。また、コンテキストに応じて、それらの機能は多様に変化していると考えられるが、多くの先行研究は、話し手の発話内容に対する態度を中心とした分析に留まっており、聞き手とのインタラクションを考慮した相互作用的な分析は少ない。そこで本稿では、話し手と聞き手の会話の連鎖に注目することで、相互作用的な分析を試みる。

日本語の日常会話において、私たちは「～じゃない？」をよく耳にする。それは、英語の否定疑問とは異なった効果をもたらしているのではないか。そして、欧米発の既存の言語理論では説明できない、東洋的な文化的志向性に動機付けられているのではないだろうか。ここでは特に、ポライトネス理論 (Brown and Levinson 1987) を引き合いに出すことで、文化に適合した否定疑問の解釈を試みたい。

2. 先行研究と本稿の目的

2.1 命題内容の「確かさ」の表示

英語の否定疑問が構造的に疑問形式を持っていることは一目瞭然である。しかし、たとえ形式

が疑問形であろうとも、相手の意向を聞くような純粋な疑問ではなく、寧ろ、肯定的表現とほぼ同義に解釈できることが明らかにされている¹⁾ (池田 1967; Quirk et al. 1985; Heritage 2002aなど)。Quirk et al. (1985) によれば、“Isn't the answer obvious?” は “Surely the answer is obvious.” を意図し、話し手が「その答えは明らかである」という命題を積極的に肯定していることを示している。また、“Can't I go home now?” が “Yes, you can.” を期待した問いであると池田 (1967: 35-6) が指摘するように、話し手が相手に期待するのは情報ではなく、命題に対する肯定的な返答だということは明白である。即ち、否定疑問は話し手の命題内容に対する確かさ、つまり、自信を示すというモダリティ的な要素を持っていると考えられる。

一方、Kawanishi (1994) は日本語の「じゃない」について英語と同様の結果を得ている。「じゃない」は話し手がゆるぎない事実だと思う情報に対して付加され、命題に異議が無い (non-challengeable) ことを表すと指摘する。池田 (1967) も「そうじゃないか」の否定疑問について同様の見解を示している。

2.2 驚き表示・確認要求

蓮沼 (1995) は「じゃないか」の中心機能として、「話し手が知識を獲得したことを詠嘆的に表明する用法」を指摘する。これは、話し手が気づいていなかったことを発見した際の驚きを示し、聞き手に意見や評価をアピールする用法である²⁾。例えば、「あら、みなさんお集まりじゃない?」という発話は、気がついたら皆が揃っていたという発見を、驚きを伴って詠嘆的に表明している用法である。そして、この副次的機能として、確認要求の行為が生まれると言及している。即ち、話し手が聞き手に驚きや意見をアピールすることは、自分の認識を相手にも共有して欲しいという訴えであり、その結果、確認要求の機能が生まれるという指摘である。日本語の否定疑問に確認要求の機能があることは、これまでも多くの先行研究が指摘している通りである (国語研編1960; 三宅 1994など)。

一方、英語の否定疑問もLeech and Svartvik (1994: 128) が言及するように、話し手の驚きを表明する。“Haven't you had breakfast yet?” は “Is it really true that you haven't had breakfast? I thought you would have had it by now!” を意図するということに、朝食をまだ摂っていなかったことに対する驚きを示す。ただし、英語の驚き表示は日本語のそれとは質を異にするようである。日本語の場合は、気づいていなかったことを新たに発見したときの驚きを示すが、英語は、話し手の前提、あるいは期待が覆されたことに対する驚きである。つまり、上例を借りれば、相手は朝食を既に摂っているという話し手の思い込みが覆されることによる驚きを示す。

また、英語の否定疑問には日本語のような確認要求の機能が指摘されていない。Leech and Svartvik (1994) やHeritage (2002a) によれば、英語の確認要求は付加疑問で現れると指摘しており、両者を明確に区別する³⁾。このように、日英語の否定疑問の機能には、多少の守備範囲の違いが見られるものの、話し手の驚き表示の機能は共通して見られるようである。

2.3 本稿の目的

以上を整理すれば、先行研究では話し手が命題内容に対してどのような態度表示をしているか (確かさや驚きなど) という、話し手の意志に従った働きかけを中心に扱っている。しかし、メイ

(2005: 62) が「発話は、使用のコンテキストとの関係性によって、意味を主に決定されるのである」と言うように、聞き手とのやり取りや発話の「場」に目を向ければ、話し手だけではなく、対話相手に志向した態度が見えてくるのではないだろうか。

本稿では、発話と、それを取り巻く全体を考慮しながら、会話参与者同士の意見交渉が否定疑問の使用の前後でどのように変化するのか（あるいは、変化しないか）を観察することによって、否定疑問が相手にもたらす相互作用的機能を捉える事を目的とする。そして、日英語の否定疑問の使用が、どのような文化的背景に裏打ちされているのかについて考察を加えたい。

3. 方法

3.1 データ

友人同士（親）の女性ペアと、年齢差のある初対面（疎）の女性ペアがそれぞれ、意見交渉をしながら15枚の絵カードを並べ替え、ひとつの話を作り上げるという課題解決型タスクの様子をビデオ収録した⁴⁾。原作の物語（Trondheim 2003）は、断崖絶壁に出くわした主人公がそれを飛び越えようとあれこれ試みる様子を滑稽に描いたセリフの無い漫画であるが、被験者には「正しい答えはありません」と断り、ペアが合意に達するまで自由に意見交渉をしてもらった。

日英語とも、親疎ペアそれぞれ8組ずつ、計32組、延べ64名を分析対象とした。アメリカ英語（以下、英語）データは合計102分（親：52分、疎：50分）、日本語データは合計126分（親：60分、疎：66分）で、1ペアあたりの平均所要時間は、英語がおおよそ6分、日本語がおおよそ8分であった。

3.2 定義

Heritage (2002a) 及びKoshik (2005) を援用し、否定疑問の定義として「否定辞を伴った疑問形式を含む発話」とした。これは、“Why don't you~?” といったwh- 疑問形式を含まず、YES-NOで応答できる疑問のみを対象としている。具体的には、英語では“Can't you~?” や “Don't you~?” で始まる文を、日本語では「～じゃない？」を含む表現で終わる文に焦点を当てた⁵⁾。

尚、田野村 (1988) や上原他 (1999) は「じゃない (か)」について、イントネーションの上がり下がりによって機能分析を行っているが、本稿で見られるのは上がり調子の「じゃない」が多くを占めている。

4. 分析

以下では、質的分析によって特徴的に現れる言語ごとの傾向を捉えた後、量的分析によって、それぞれの傾向が何を表しているのかを読み解いていく。日英語の否定疑問に共通し、また、相違する機能とは何だろうか。

4.1 質的分析1 (英語)

4.1.1 意見の対立の維持

例1は親のペアの会話である⁶⁾。一旦、全て並べ終えたカードの順番が妥当かどうかについて、現状維持を主張するLと、あるカードの移動を主張するRのやり取りであり、意見は拮抗している。Lの発話に注目してみたい。

(例1)

01 R: Well, do you think with this one? I think this one might up here.

(中略)

02 R: Yeah, so I think this one goes like here and he walks back and he's like, 'Hey, come jump over the cliff with'. And then he's like, [See, see, this is...

03 L: [But then this one could go there then too, couldn't it?

04 L: Cuz he's walking back that way, you could put it either place.

05 L: [You know?

06 R: [Yeah, but he has to walk back again.

07 R: Like I think this one is the walking back from here. But see...

08 L: But there's no walking back then to get to the yellow guy.

09 L: Like, you would have to put that one with this one, I think.

(沈黙0.9秒)

10 L: Don't you think? =

11 R: =Why?

1行目のRの問題提起を契機に、二人の意見は対立を始める。Rは登場人物を一旦後戻りさせるべきなので(6-7行目)、後ろ向きに歩いているカードを最初のほうに挿入すべきと主張する。それに対してLは、Rが動かすべきと主張するカードは別のカードとセットなので、登場人物が後ろ向きに歩くシーンは割愛でき、カードの移動は不必要だと真っ向から反論している(8-9行目)。そして、続く10行目で、Don't you think?と否定疑問で問いかけ、相手に賛同を促している。

注目すべきは、9-10行目の間に1秒近くの沈黙が存在することである。Lはこの沈黙によって、相手が自分の意見(カードの現状維持)に納得していないことを知覚する。そこでLは、否定疑問を用いることによって、自分の立場を再度明確に示し、提案を受諾するように相手に念を押しているのである。

このようなLの念押しも甲斐なく、結局、11行目のwhy?というあからさまな対立的発話によって、Rには受諾を拒否されるが、否定疑問はこのような参与者間の意見の対立がはっきりしている場面において、相手を自分の畑に引き込もうとする際に用いられている。

4.1.2 意見の一致から離脱の表明へ

例2は同じく親のペアの会話である。両者が物語作りの方向性についてコンセンサスを得た後、再び意見を対峙させる場面において否定疑問が発話されている。3人いる登場人物のうち、

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

黄色の人物（6行目でRがthe big yellow oneと指標するもの）に関する話から並べ替えようという方向で両者の意見が一致しているが、そのまま会話が協調的に進行すると思いきや、8行目でLが新たな提案を持ちかけている。そこでは、否定疑問を用いることで、それまでの協調的な会話の流れからLが離脱したことを表明しているようである。

(例2)

01 L: [1 Well then, jaa@@

02 R: [1 Okay, so...

03 L: Um[2 m

04 R: [2 This one has to- is maybe after he gets smashed?

05 L: I think so, because he goes back [3 and he looks kinda depressed.

06 R: [3 So this goes... that goes back with that one. So... the ones with the big yellow one. Are these all [4 of them?

07 L: [4 Yeah, yeah, yeah.

08 L: This one goes there too, I think. Don't you think [5 so?

09 R: [5 Do you think that's after he get smashed?

1-2行目では、LとRはそれまで議論していたストーリー展開が合意に達した事を示すため、それぞれWell thenやOkay, so...と言って仕切り直しをする。それから会話は何度もオーバーラップをしながら協調的に進んでいき、4行目のRの問いかけに対してLがI think so.と同意を示すなど、コンセンサスに従ったスムーズな展開を見せている。

注目したいのは6行目以降の展開である。RがAre these all of them?と言って、黄色の人物のストーリーはこれで全部かと問いかけた際、Lは二つ返事で（実際はYeahを3回発しているので「三つ返事」と言うべきだろうか）一旦受諾を示す（7行目）。しかし8行目ではすぐにそれを撤回して、このカードも黄色のストーリーに入るはずだ、と否定疑問を伴って提案を行っている。これによって、二人が順当に作り上げてきた一つの意見には分岐が生じる。それは、I thinkという句動詞に続けて、Don't you think so?と、間髪をいれず、まくしたてるように発話されることから明らかであり、コンセンサスに沿っていた状態が変化したことを示している。このように、話し手は否定疑問によって、自らの認識の立場（epistemic stance; Koshik 2005）を強調し、相手にはっきりと離脱のシグナルを送ることで、自分の意見を相手と区別化して提示しているといえる⁷⁾。

以上より、英語の否定疑問は、先行研究が指摘するように、意見を強く主張する場面で用いられている。しかし、それは、単に主張をするのではなく、相手と自分の認識が異なっていること、つまり、相手との独立性を示すためだと考えられる。

4.2 質的分析2（日本語）

上述のように、英語の否定疑問は相手との意見の相違を主張し、いわば会話参与者同士の独立

的且つ区別的な姿勢を示す。しかし日本語では、否定疑問によって独立的な姿勢を示すことは無い。自らの意見を述べるという行為は極めて控えめに行われ、否定疑問は、相手の意見に歩み寄っていくための装置として機能しているようである。

以下、4.2.1では話し手という立場からの、4.2.2では聞き手という立場からの「じゃない」を見る。そこでは、相手に譲歩をみせたり賛同を示すための否定疑問が観察され、二人の会話参加者の心的距離には、一定の近さが保たれているようである。4.2.3では、それを象徴する例として、参加者同士が相互に否定疑問を使ってアコモデーションを高めている例をみる。

4.2.1 相手への譲歩：「不確かさ」の表示

Kawanishi (1994) は、「じゃない」が予め参加者同士で共有されている情報（既知の事実など）に付加し、話し手の命題に対する確実性を表示すると分析する。しかし、本データのように、会話参加者同士で予め共有されている情報が無く、一から話を作り上げるというタスクにおいては、それとは対照的な使用法、即ち、意見の「不確かさ」を示すような「じゃない」が観察される。

例3はタスク開始直後の親のペアの会話である。3人いる登場人物のうち誰が最初に来るべきかというLの問いかけに対し、Rが一枚のカードを指して「これだよ、これ」（2行目）と提案する。

(例3)

01 L: 誰を最初にする？

02 R: これだよこれ

03 L: あほんとだ

04 R: これじゃない？

05 R: でー

06 L: でー谷間が[あってー

07 R: [谷間があってー

Rの自信満々の提案に対して、Lは「ほんとだ」（3行目）と異議なく受諾している。注目すべきは、続く4行目でRが「これじゃない？」と再度問いかけていることである。英語のように、自分の意見を主張し、受諾するように相手に促すだけならば、3行目で受け入れがされた時点で、話し手の目的は好意的に達成されているので、会話の連鎖は収束するはずである。しかし、なぜRは続けるのか。これは、Rが自分の意見の不確かさを表明しているからだと考えられる。相手に一旦意見を受諾されたものの、「これでいいのか」と再度問いかけることで、相手に他の提案もありうることを意図している。

蓮沼 (1995) によれば、「じゃない」は話し手が聞き手に意見をアピールするというが、ここではRが一方向的に意見をアピールしていると解釈するよりも、聞き手に自分の意見の不確かさを示すことで異なった提案を導入させやすくし、話しやすい雰囲気を作っていると考えられるのではないか。

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

このことを裏付ける例として例4がある。これはLが話の主導をとっている会話であるが、否定疑問を使うことで、相手に異なった意見を導入させることに成功している。興味深いのは、この会話は、相手からの賛同が得られず意見が対峙しそうな場面で、否定疑問を用いて話し手が譲歩を見せ、相手に寄り添って行くことである。

(例4)

01 L: ジャあ、たどり着いたのってある？ないか

02 L: でも、きっと自分より小さいと飛べないよね

03 R: そうだねー

04 L: そういうことじゃないのかな？=

05 R: =えー、ちょっと待って、難しいねー

Lは、主人公が崖を渡って、対岸にたどり着いた場面のカードがあるかと聞くが、すぐに「ないか」と引き下がる(1行目)。2行目では、自分より体の小さい人をクッションにして崖を飛び越えることは出来ないよね、と相手に同意を求めるものの、Rは「そうだねー」と生返事をして(3行目)。これによって、会話を主導するLは、自分の提案がどうやら相手に受け入れられていないと察する。そしてすぐさま「そういうことじゃないのか(もしれない)な」と、自信なさそうに発して自ら引き下がり、相手に譲歩しているのである。このようなLの消極的な態度の表明は、相手Rに主導を委ねたことを意図する。従って、続く5行目でRは、「えー、ちょっと待って」とLの意見に納得していない素振りを見せることが容易となり、それまで相手主導であった会話に引き継いで、Rは新たな展開を作る機会を得ているのである。

以上のように、「じゃない」は自分の意見の不確かさを表明することによって、たとえ対話相手と意見が対峙しそうな場合でも、話し手側から相手に譲歩する態度を示し、会話を収束に向かわせている。

4.2.2 相手を立てる同意表明

多くの先行研究では、話し手という立場から、「じゃない」が相手に確認要求、あるいは、同意要求を促すと指摘する(国語研編 1960; 三宅 1994; 蓮沼 1995など)。しかし、実際はそればかりでなく、時には同意を「表明する」という聞き手としての役割を果たすことがある。

例5は親のペアの冒頭の会話である。15枚のカードを目の前にして、どれから取っ掛かれれば良いのかについて話している。そして1行目で、Rが同じ場面のカードごとに纏めればよい、と提案を始めている。

(例5)

01 R: たしかに、全部こうやってまとめればいいんだよ、同じやつだけ

02 R: これ、[でしょー

03 L: [これと、これも、だよ

04 R: これもこれだと思う？

05 L: じゃない? =

06 R: =これっぽいね

Rから提案を受けたLは、3行目で「これと、これも、だよ」と賛同を示し、会話はコンセンサスに従って順調に進んでいる。注目すべきは、4行目の「このカードはこれと同じ場面だと思う?」というRの質問に対して、Lが「じゃない?」という否定疑問で応答する部分である。ここでは「質問と応答」という隣接ペアを成していることは明らかであるが、否定疑問で応答を行うのが非常に興味深い。これは当然、Rに質問をしているのではなく、相手に同意を示す装置として解釈でき、そのことは、続く6行目でRが「これっぽいね」と、終助詞「ね」を伴って、相手と意見を共有している (Cook 1990) 様子からも分かる。この例のように、コンセンサスが保持されている状態で、否定疑問が発話され、さらに相手に寄り添っていく例は、英語では見当たらない。

そもそも隣接ペアは、「状況の適切性」(conditional relevance) に基づいて生成されるものである (cf. Schegloff 1972 [1968])。従って、厳密に形式的な連鎖に従うのなら、4行目のRの質問として最も相応しい応答は、イエス (「うん、その通りだ」) かノー (「いや、違う」) の返答である。ましてや、相手に同意を示すのであれば、「イエス!」と声を大にして賛同した方が、効率的な情報伝達が出来るとは思えないかと思ふ⁸⁾。ではなぜ「イエス! (うん、その通りだ)」と言わずに「じゃない?」と応答するのか。この2つではどのような効果の差が生まれるのだろうか。前者の返答では、はっきりと意見を述べた応答であるため、あたかも、予め自分がそう思っていたかのような雰囲気を醸し出すだろう。つまり、認識的権威 (epistemic authority; Heritage 2002b) の観点から言えば、「当然そうだ、前から私はそう思っていたのだ」という認識の独立性を示し、相手とは区別化したような発話となりうる。しかし、後者のディヴァイスを用いれば、そのような独立性は醸さないで済む。即ち、己を前面に押し出すことなく、相手の意見をサポートできるのである。従って、対話相手のRが「じゃない?」という否定疑問形式の応答に全く不和を覚えることなく、さらには「これっぽいね」と付け加えて、相手との連帯意識 (solidarity) を高められるのは、「じゃない」が積極的な同意表明であり、且つ、相手の主張を立てるような助長的な機能を持つことを、会話参与者同士が心得ているからだと考えられる。

4.2.3 アコモデーションの促進

ここまでは「じゃない」について、話し手としては、提案の不確かさを示すことで相手に譲歩の姿勢を見せることを、また、聞き手としては、相手を尊重しながら好意的な同意表明を示すことを見てきた。これらから共通して見出せることは、たとえ二人の意見が対峙しそうなになったとしても、どちらかが必ず歩み寄っていき、あるいは、意見の対峙が無ければ、互いの共通認識を確かめあうことから、会話参与者同士の心的距離には一定の「近さ」が保たれていることである。即ち、英語のように否定疑問によって認識の独立性を示すことはない。それどころか逆に、「じゃない」によって互いの認識を共有化し、参与者間の連帯感を高める役割があるようである。以下の例6はその象徴として、相互に「じゃない」を使うことでアコモデーションを高めている例である。

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

これは親のペアの会話で、タスクに試行錯誤している場面である。抜粋の会話の長さは20秒あまりだが、その短い間に「じゃない」が頻繁に、且つ、連続的に観察される。

(例6)

01 R: なんでこれが上にのっかってんだ?

02 L: そうなんだよ、それが変

03 L: え、こ、これはなんか最中じゃない?

04 L: あ、ちがうかな、あ、これ、[あ、でも、え、うん、これ、ぎゃ

05 R: [あ、これ、だから、これ、ここじゃない?

06 R: これに乗っちゃって、黄色いのが跳べたんじゃないの?

07 L: はあー

08 R: これは、なに、じゃあ

09 L: @@それ、それ意味わかんないよね、じゃちょっとそれ保留じゃない?

10 R: 保留にしとこ

試行錯誤している中で使用される「じゃない」は、互いの意見を提示しあう機能として解釈できよう。しかし、それは決して両者の対立を示しているわけではない。あれこれ意見を提示する事で、なにか糸口を見出そうとする、両者の好意的な態度の現れなのである。このことは、Tannen (1989) が、二人でリズムを楽しむかのように繰り返されることばの連鎖は、話し手と聞き手を積極的に会話に引き込む作用 (involvement) をもたらす、と指摘していることから明らかであろう。このように、「じゃない」は単に意見を提示すること以上に、二人のアコモデーションを高めるというメタプラグマティック的な機能を備えており、参加者が互いの距離を縮めながら、会話を協調的に前進させているのが読み取れる。

4.3 量的分析

以上の質的分析から見てきた日英語の否定疑問の機能と、会話参加者の親疎関係にはなんらかの関連が見られるのだろうか。

表1、表2は、英語と日本語の否定疑問のトークンと親疎関係の分布を表している。日英語に共通して観察されることは、親のペアのほうが疎のペアより否定疑問が頻用されていることである。また、日本語の生起数は、英語のそれと比べて顕著に多いことが分かる。

表1 英語の否定疑問のトークンと親疎関係の分布

	親のペア	疎のペア	合計
Don't you (think) ~?	3	0	3
Can't we ~?	1	0	1
Couldn't he ~?	1	0	1
Doesn't he ~?	1	0	1
合計	6	0	6

表2 日本語の否定疑問のトークンと親疎関係の分布

	親のペア	疎のペア	合計
じゃない	44	0	44
じゃないですか	0	7	7
じゃない	2	0	2
わけじゃない	0	2	2
合計	46	9	55

まず、日英語とも親のペアにおいてこれほど多くの否定疑問が確認されるのはなぜであろうか。それは、否定疑問の第一義的な機能が、話し手の命題への確信を示し、意見を提示・主張することだからだと考えられる⁹⁾。そもそも意見を主張するということは、相手とのコンフリクトを生み出す可能性を持った面子威嚇行為 (face threatening act) である。そこで人は、当然コンフリクトを避けようとするが、その傾向は、初対面という疎の場面において尚更なのは容易に想像できよう。換言すれば、英語のように、否定疑問を用いて意見を強く主張し (Heritage 2002a)、相手と認識を区別化している事を表せるのは、気心の知れた親しい友人同士ゆえなのである。

注意すべきは、日本語の否定疑問の多さについて、日本語のほうが英語よりも相手に意見を強く主張する場面が多いとは、単純に解釈できない点である。先行研究でも指摘されているように、確かに日本語の否定疑問は、話し手が意見を提示する機能を持っている。このことは、疎よりも親の間柄で多く観察されることから明らかだろう。しかしながら、上述の質的分析で見たように、その主張の仕方は英語のように区別化した対立的な意見を相手に伝えるためではなく、相手に歩み寄った、協同的な意見の提示をするためだといえる。例えば本稿のデータにおいて「じゃない」は、たとえ対立が生まれそうになった場合でも、一方が譲歩するときに示された。加えて、相手の意見を立てて好意的な同意表明を表したり、連帯意識を高める場合にも出てきた。これらは、日本語の会話参加者が相互に寄り添いながら、「和合した」会話を紡いでいることの証と言えるのではないだろうか。

5. 考察とまとめ

以上の分析から明らかになった事柄は、次のことである。

- 日英語に共通して、否定疑問は自分の意見や提案を述べるときに用いられる。
- 英語の否定疑問は「区別型」と特徴付けられ、相手と区別的な態度を示す相互作用的機能を持っている。
- 日本語の否定疑問は「和合型」と特徴付けられ、相手に和合的な態度を示す相互作用的な機能を持っている。

つまり、否定疑問の根源的な機能は、日英語間で差が見られないものの、それらが持つ態度は異なることを意味している。即ち、英語では、相手と異なった認識を持っている事を伝えるが、日本語では、逆に、歩み寄り、寄り添っている事を相手に伝達するのである。従って、日英語の否定疑問の相互作用的機能は、意見・提案を述べるという機能を中心として、それを取り巻く作

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

用に相違があることから、図1のようにイメージすることが出来ると考えられる。

文化人類学者をはじめとした研究者は、同様の言語行動でも、社会的・文化的要因によってそ

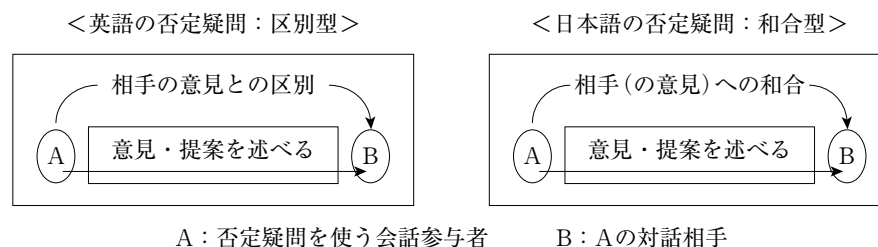


図1 日英語における否定疑問の相互作用的機能のイメージ

の表現が異なりうることを指摘しているが、日英語間でこのような態度の違いが現れるのはなぜだろうか。ここでは、意見を述べることに對する言語ごとの文化的志向性を、「個」の捉え方と絡めて解釈を試みたい。

英語では、否定疑問を使って意見を述べるという面子威嚇行為が、相手との意見の相違を強調し、示差することで遂行されることを示した。これは、会話参加者が「個」としての強力な独立性を維持していることを意味する。従って、己と言う、他とは独立した自我が意見を述べるのであるから、それはポライトネス理論 (Brown and Levinson 1987) でいうならば、自分の意見を積極的に相手に受け入れて欲しい、というポジティブ・ポライトネスの一方略として解釈することができよう。

一方、日本語の否定疑問は、対話相手に合わせて収束していく意見提示の方法であった。ポライトネスの枠組みにはめ込むならば、相手と対立をすることなく判断が述べられているので、相手に押し付けたくないというネガティブ・ポライトネスの現れだと言えるかもしれない。しかし、メイ (2005: 400) が指摘するように、ポライトネスの根底にあるフェイス (face) の概念は、社会的要素や間主観性を排除した、「個人」の位置や立場を反映していることに問題がある。従って、日本語会話のように、話し手と相手が寄り添い、和合することで、参加者間の「個」の線引きが難しいような会話の営みにおいては、自己の独立を前提とするフェイスの概念が適用しきれないのではないかと考えることが出来る。

フェイスとは「公の場における自己のイメージ」 (public self-image) (Yule 1996: 134) である。「建前」ということばが反映しているように、もちろん日本語にも公共の場において、どのように自分を見て欲しいのかという、フェイスに似た欲求がある。しかしそれを動機付けるのは、社会的な立場や属性といった外的要因であり、個人という内的で部分的なものではない。また、本データのように、協調が必要な課題遂行場面においては、会話参加者は「個」の集まりではなく、会話という場に組み込まれた融和的な構成員なのである。このように全体的な意識が強い日本語会話においては、フェイスという「個」中心的概念はかなり希釈されていると考えられないだろうか¹⁰⁾。

ここで議論している日本人の「個」の融和性は、井筒 (2001) の「真如」の説明によって確証を得ることが出来る。と考える。「真如」は大乗仏教における枢要概念で、「二岐に分離しつつ、分

かれた両側面は根元的平等無差別性に帰一する」(井筒 2001: 17) という東洋の哲学観である。心理学者の河合隼雄氏のことばを借りれば、「世界というものは本当は一つで、そのひとつの世界には、私とかあなたとかいう区別は存在しない。そのような区別は妄想である」(大江他 1996) ことが「真如」の本質である。さらに河合氏は、日本人のものの考え方は「真如」という仏教の言葉に通じていると述べている。

ここで強調したいのは、「区別が存在しない」ということである。先に示したように、日本語では英語のように「個」の区別を行わない協同的な志向が見られる。つまり、日本語の会話参加者は「二岐に分離した」個人でありながらも、「根元的には」両者の間に明確な線引きはなく、「平等無差別性に帰一する」と考えられる。以上のことは、片桐 (2005; 2006) の同様のデータを使用した合意形成の分析において、アメリカ人話者におけるアイディアの帰属は個々の参加者にあるのに対し、日本人話者では、最初から共有が前提とされているようだという考察結果とも符合していると言えよう。

日本語と日本の文化の連関について、日本語は共話 (水谷 1983) の会話であるとか、相手に判断を委ねる (水谷 2003) とか、日本は察しの文化である (江川 2003)、というように、様々な見解が過去の豊富な研究によって示されているが、このような日本語の振る舞いはすべて、真如という、無意識的に日本人の中に流れている東洋の哲学観から産出されるものだと考えられないだろうか。そうすることで、フェイスやポライトネスなど、既存の理論では充分説明できない日本語の言語行動が、日本語の社会的・文化的実践の一つとして正当に解釈されるのではないかと考える。

謝辞

本稿で使用したデータは、平成15～17年度日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (1)、課題番号15320054) 「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(代表者 井出祥子) によって収集されたものである。

また、本稿は、社会言語学会第18回大会 (2006年8月27日、於：北星学園大学) において口頭発表した原稿を基に、議論を発展させたものである。コメントを下された諸先生に、記して感謝したい。

注

- 1) Bolinger (1957) やQuirk et al. (1985) は、純粋に情報を求める (seek for information) 疑問ではない、このような疑問形式を “rhetorical question” と呼んでいる。また、Koshik (2005) は、Bolinger (1957) らの議論を踏まえ、これを “reverse polarity question” と名を改め、詳細な記述を試みている。
- 2) 蓮沼 (1995) はこれを「認識生成のアピール」と呼ぶ。
- 3) Leech and Svartvik (1994) やHeritage (2002a) によれば、付加疑問の “He likes his job, doesn't he?” は、“I assume he likes his job. Am I right?” と解釈され、相手に確認を求める (ask for confirmation) のに対し、否定疑問は、話し手の命題に対する強い主張 (assertiveness) を導く装置であるとする。
- 4) 親のペアの会話参加者は、実験前に記入してもらった質問紙において、相手のことを「よく知っている」と回答している。
- 5) 本稿では「～じゃない?」の形式のみに注目し、「～じゃん?」や、「～ない?」(例えば「難しくな

日英語ディスコースにおける「和合型」と「区別型」の否定疑問

- い?」)などを含めた分析は次稿に譲ることとする。
- 6) 会話の文字化に使用する記号は以下の通りである。
 =ラッチング @@ 笑い
 [オーバーラップ (直後に数字があるものは、同じ数字の括弧と重複していることを示す。)
- 7) 7行目のLの同意は、直前の、So this goes... that goes back with that one. So... the ones with the big yellow one.に対して行われたものと見られる。しかし、発話のタイミングからすると、Are these all of them? に対する同意とも受け止められうるため、「待った」の姿勢を明確に示すため、否定疑問を用いて自分の考えを明確にしたと考えられる。
- 8) メイ (2005: 245) によれば、このように、厳密に形式的な連鎖に基づいた枠組みでは説明できない連鎖を、語用論的一貫性 (pragmatic coherence) と呼ぶ。
- 9) 第一義的とは、指標性のことを借りれば「前提的」と言い換えられると考えるが、詳しい議論はここでは行わない。
- 10) 英語の会話では、“make sense” というフレーズが度々現れる。これは、課題解決場面における目標が「最も正しく真である」と思われる物語を完成させるという、真理の追究に重きが置かれているからだと考えられよう。しかし、日本語では正しいものが何かを追求することよりも、寧ろ、会話の場をいかに心地よく作り上げていくのが重要視されているようであり、全体的意識に注意が注がれていることの現れだと考えられる。

参考文献

- Bolinger, D. L. M. 1957. *Interrogative structures of American English: the direct question*, Publication of the American dialect society, 28. Alabama: University of Alabama press.
- Brown, P and S. Levinson. 1987. *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University press.
- Cook, H. M. 1990. 'The sentence-final particle *Ne* as a tool for cooperation in Japanese conversation'. H. Hoji (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*. Stanford: CSLI. 29-44.
- 江川清. 2003. 「日本人の言語行動の実態」荻野綱男(編)『朝倉日本語講座9 言語行動』朝倉書店. 29-44.
- 蓮沼昭子. 1995. 「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄(編)『複文の研究(下)』くろしお出版. 389-419.
- Heritage, J. 2002a. 'The limits of questioning: negative interrogatives and hostile question content'. *Journal of Pragmatics*, 34. 1427-1446.
- , 2002b. 'Oh-prefaced responses to assessments: a method of modifying agreement/disagreement.' C. E. Ford, B. A. Fox, and S. A. Thompson (eds.) *The language of turn and sequence*. Oxford: Oxford University press. 196-224.
- 池田義一郎. 1967. 『英語の語法 表現篇6 否定・疑問・強意・感情の表現』研究社.
- 井筒俊彦. 2001. 『東洋哲学覚書 意識の形而上学—『大乘起信論』の哲学』中公文庫.
- 片桐恭弘. 2005. 「コミュニケーション行動における規範と共有」片桐恭弘・片岡邦好(編)『講座社会言語科学5 社会・行動システム』ひつじ書房. 202-219.
- , 2006. 「解放的語用論に向けた会話情報処理からのアプローチ」『社会言語科学会第18回大会発表論文集』p. 216.
- Kawanishi, Y. 1994. 'An analysis of non-challengeable modals: Korean -canha(yo) and Japanese -janai'. N. Akatsuka (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, 4. Stanford: CSLI. 95-111.
- 国立国語研究所(編) 1960. 『話しことばの文型(1)—対話資料による研究』国立国語研究所.
- Koshik, I. 2005. *Beyond rhetorical questions: assertive questions in everyday interaction*. Amsterdam/

- Philadelphia: John Benjamins publishing company.
- Leech, G. and J. Svartvik. 1994. *A communicative grammar of English*, 2nd edition. London: Longman.
- メイ・ヤコブ(著)小山亘(訳) 2005. 『批判的社會語用論入門—社会と文化の言語』三元社. [J. L. Mey. 2001. *Pragmatics: an introduction*, 2nd edition. Malden/Massachusetts: Blackwell publishers.]
- 三宅知宏. 1994. 「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1. 大阪大学文学部日本語学科現代日本語講座. 15-26.
- 水谷信子. 1983. 「あいづちと応答」水谷修(編)『講座日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房. 37-44.
- 水谷修. 2003. 「これからの時代に求められる日本人の言語能力」国立国語研究所(編)『第10回国立国語研究所国際シンポジウム第2部会報告書 日本語コミュニケーションの言語問題』国立国語研究所. 15-25.
- 大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎. 1996. 『日本語と日本人の心』岩波書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. New York: Longman.
- Schegloff, E. A. 1972. 'Sequencing in conversational openings'. J. Gumperz and D. Hymes (eds.) *Directions in sociolinguistics*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc. 346-380. [*American anthropologist*, 70; 6. 1968. 所収]
- Tannen, D. 1989. *Talking voices*. Cambridge: Cambridge University press.
- 田野村忠温. 1988. 「否定疑問文小考」『国語学』152. 16-30.
- Trondheim, L. 2003. *Mister O*. Tokyo: Kodansha.
- 上原聡・福島悦子・北野浩章. 1999. 「そうじゃないんじゃないんですか—自然談話をもとにした「じゃない」の研究」アラム佐々木幸子(編)『言語学と日本語教育』くろしお出版. 197-212.
- Yule, G. 1996. *The study of language*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University press.